



河合
文
坤

文 研
911.33
Mu24s
2



文学研究科
中村俊定
No. 63



猿蓑集卷之五

鳥の羽を刷ぬカキスころしと我

去来

一ぬきりばふの原志心もさ 芭蕉

股引の朝こめりけいんて 凡兆

たぬきいもよすお條張のら 史邦

まいつたふき道う家書れ月 蕉

くもくれす品物乃梨 来



4-556

45-5062

瘦骨のすく起るる力なき
 陸をさうりて車引こむ
 うまを積穀垣うりて
 いすや別れの刀さし出す
 せうけい掃てうらをうら
 地をい切くを死くいんよ
 青天よ有明月の影をけり
 湖水の枯乃比良代もを
 蕉 来 邦 兆 来 蕉 兆 邦

柴の戸や蕎麦ぬすむか歌をよ
 ぬのこ若智ぬ見れうら
 押合てう寝くハ又きつり
 うらばや乃まゝの赤き
 一掃鞆つゝる窓のうら
 枇杷の古をよにまき
 邦 兆 来 蕉 兆 邦

去来九

色蕉 九
凡兆 九
史邦 九

凡兆

市中ハ物のよほり物也此月

あけしくと門く乃勢 芭蕉

一番草取の果は種よ望 去来

灰くらしくくくあ一枚 兆

い筋ハ銀も見えす早自由 蕉

たそきくく長き指 来

草村と蛙こはるのうらな
露乃そ月とらにけしゆす
道心のむらりあはれつむじ時
能をれ七尾の冬ハ位うを
魚の骨志りある道の老をそ
待人入一水門の鑑
まうり屋風を倒す女を
湯屋ハ竹の葉子儼し

蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

苗香式とて吸るあす夕月
傍やともしくきりし
さる川の橋とをそゆる輝月
名 一年の比子いもや
五六をよまつりて家儲
是れおよもい黒川よの石
追うて早よ湯了乃刀持
てんらうそ何し水にはいり

兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来

戸障子もむらむらしの賣屋敷
 来 蕉 北 来
 ころも草鞋をば作る月夜
 来 蕉 北 来
 蚤ふさふさふと起し初秋
 来 蕉 北 来
 そめもころもあつる秋
 来 蕉 北 来
 ゆくゆく蓋のありぬ草履
 来 蕉 北 来
 草履は新田くちかたの赤や
 来 蕉 北 来
 いのら娘も撰集れも

ともよくよ品うらむる意と
 来 蕉 北 来
 波世の果を皆小町ゆかり
 来 蕉 北 来
 あにあり粥すも海を
 来 蕉 北 来
 出るぬまをたもはるる夜
 来 蕉 北 来
 手代りた風ははるるあけ
 来 蕉 北 来
 のよこぐさぬるの糸し

元兆 十二

芭蕉 十二

去来 十二

凡兆

灰汁桶の辛やまのまらり

あゆみかすりて平直寝下る秋 芭蕉

新玉をぬかす月うけよ 野水

みへて蟻く十乃とらふ 去来

糸代経へき物と極く子向て 芭蕉

雪の音にたしき雪と降る 兆

藤下

葉出して松は餘る春の約
 唐那のうねねとせられぬ
 中よりにりまると喰ハ風薫
 陸の白やまをりきりてうと練よ
 まのやまのうねとて体じ
 運口くもさぬらりのま
 金鑿と人よまのやま
 大の月とよまの月

葉 水 葉 水 葉 水 葉 水 葉

町の秋の文は叶や
 何とよんまのうねらりて
 花やちるよの西念の衣を
 本より酢蓋よまのうねつ
 名
 うるや山陰供よ四つ
 紫ふは家のむらまをう
 冬を乃あはれは北
 旅の馳をに有ぬ

葉 水 葉 水 葉 水 葉 水 葉

丁もはしむ女は知恵もくもく
何れもくもく 糧はくもく
夕月夜星の光もくもく 花もくもく
人もくもく ちもくもく 水
うそつぎに自慢いもくもく 越
又もくもく ちもくもく 水
堤より回の音もくもく 水
かきもくもく ちもくもく 水

水 来 北 蕉 水 来 蕉 北 来 水 来 蕉 水 来

地うんは尻やさくもくもく
雨のやより水もくもく 迅速
昼もくもく 水もくもく 水
水もくもく 水もくもく 水
糸もくもく 水もくもく 水
水もくもく 水もくもく 水

水 来 北 蕉 水 来

九 兆 九

後

芭蕉 九

野水 九

去来 九

餞乙羽東武行

芭蕉

梅より葉まわりとけ者のさうけ

かきあつりこそ君の猿乙羽

を云雀あつ小田よ土持比る珠碩

志しき猿よてりよれよ条素男

川隅よ虫齒うゑて房の月刀初

二階の窓をさされよあき蕉

表下

放やううつは跡はるもせず
 編のなま延乃力たきくせ
 むつらんた初まにけは跡麻ふ
 心発願しと碎みうはれ
 卯の割乃箕まに無ぬ少ぬ方
 すこまきるねのまのうあたり
 萩のれすくまのれまきり
 若むくしる百舌るう一勢
 智月 刃 男 碩 刃 蕉 碩 男

懐まよまま正あつしる雉の月 凡兆
 汐まきまきぬあつら 刃
 鏡の柄まきまきりまきり 去来
 灰まきまきりすかりあ跡 兆
 名 喜れ目まはまきりてくる跡机 正奏
 店屋まきりまきりまきり 来
 汗ぬまきりまきりまきり 半残
 まきりまきりまきり 土芳

大膽よゆきしこゝろおぼえ
 身われ紙の取所なき
 小刀乃拾又なる細工も
 棚よ火とりす大年の夜
 うらまゝにねも後年の海
 しのみ合せもあつたかきぬ
 岫もわれぬとく破る解
 碧油糸をせと志し自記
 残 芳 殘 園 風 猿 雖 風 殘 雖

咳^ウの隣はらも縁つる人
 涙へはくよほとくうん顔
 形なりと強をとおひる金銀盃
 うすきあかる糸の割下結
 花よ又こころけつものさし
 雛の被る色深きこころせ
 号 風 嵐 蘭 史 邦 野 水 羽 紅

芭蕉 三

葉六

乙勃	五	土芳	三
珠碩	三	園風	三
素男	三	猿錐	二
智月	一	嵐蘭	一
凡兆	二	史邦	一
去来	二	野水	一
正秀	一	羽紅	一
半残	四		

猿蓑集卷之六

幻住卷記

芭蕉州

石山凡真名向のうらゝ山と
 國分山と云うはを國分寺の名を
 傳ふ下よりへ一軒庵を細く流を流
 して翠峯よきと云う三曲二百寺
 には八幡宮ありては神体
 ハ跡絶えざる像とや唯一の家と云

甚忌ゆる事と两部光成和け
利益の塵並同しう志たし
又貴し一日比た人の詣さられ
いし神とい物志つるある傍し位
捨し草の戸をよき根葉新
なるとと屋のまら壘居て狐狸
婦しうをほより幻位養と云あり
の信なるし八勇士菅沼氏曲水子と

伯父のあん坊りしを今八年
ししと成りて幻住さし人の名を
のと殊とあり又市仲城さし
十年計ありてみ十年下らさ
ふりて養虫のふのを先し踏中
家近離て奥羽家沼の異者とい
し面をさししとふにあり
ししき北海の荒磯といふ

破らんとて歳湖水の波は漂鳥の
浮巢の流とくくくくくくくくくくく
乃陰のふとく軒端のふとく
ふとくは流とくくくくくくくくく
初いとくくくくくくくくくくく
しとくくくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくく
ふとくくくくくくくくくくく

行客のつれづれはささくくくくく
のくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
南よとくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
北風海を渡しくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

後下

木樵のあり林蔭のふ田の早苗とく
争ひ雲のたふ夕雲のたふよ水鶴は
お音表景地とくくぬくはとく
けし中よの三上山ハ古亭の付よ
ゆきして武をたゆ古をたゆ
い〜田上山古人をとくぬとく
う山嶽千丈の亭袴腰こくく山も黒
津の里いとくぬくありて獨代

よろしく〜人ら〜美系集の溪をり
きつた眺るを〜ありぬとけ乃
亭〜遠のほり松の棚作葉の因座
をとぬ〜積の腰掛とく名付彼海葉
よ葉と〜い〜主のほ亭よ〜巻を
結つる王公羽除衾、徒よ〜あ〜唯睡
辟山民とぬ〜扇顔よ是よ〜け
ゆ〜空山よ風をよ拍て〜塵ス〜

く心もえあふけさる谷の清水を
汲く自らちりくくの水を捧ぐ
一掬の価いしきりし昔作らん命
けよんくくけりけりくくくを
る物よきいさけ持佛一向を臨て夜
の物よきいしきりくくくくく
つりさばよむ執業するえん山の僧と
か茂の甲斐やけり嚴子とてはく

洛よのほりいさきりりもあちる
しと顔とんいしきりくくく
深く幻信菴のこときよきり
草菴の記念とありぬよくく山
い旅の寝と云きり器とありくく
まけ木より梅を越の安善なり
枕のとれ柄よぬりきりきり
ぬくくよきりきりきりきり

里の木のこた入しきとこのま乃稲
 らいあー兔の豆細よふあか
 家ゆきぬ農談目既よ山の端よ
 しきさ夜屋静よ月を待つし
 新を付ら燈を取らぬ雨よ是れ
 をささすいこいこいあふよ
 深寂を好し山野よ跡をゆくま舞
 とよあはれや病を人よ供てを

をいしんくよ似より情年日月
 梅う拙を身代科をゆゆ
 あああは官無命れ地をさ
 やしんか佛離祖室の扉よ入
 ら舞とせしもあさりた子よ月を
 よあよせめ花鳥小情を芳し
 暫く生涯のちり事とせしあれ
 ぬよすれ無るよ一筋よ一糸

古松鬱兮綠陰清
第屋竹椽總數間
內有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川
風景依稀入誹城
此地自古富勝覽
今日因君尚益榮

元祿庚午仲殊日 震軒具拜

儿右日記

時多北月中んてやる林扉の
くくさん代跡志つやあんの
鶏ししししししししししし
海に五月雨うぬや一と
軒らしき名梨やれ棧のあ
細脰たやまやまのやま
曲水 野水 去来 元兆 千那 珠碩

贈紙帳

おもゆる紙地よとてふちあり 野徑

いづれもまじし路のなまじりゆき 里東

雲飛鳥そのふもふけのなま 乙羽

顔や障乃中れ花うつら 怒誰

白きく一帯よと結くま 探志

五羽六羽菴らりすんと香 元志

木ついでたわしと鳴る水鶴 泥土

笠あふりねすくや風の也 史邦

月影や海をな庭目よりしと 正秀

志つらさの雪のな洗し法水 柳陰

原さやらのまじれむと 如行

訪よ留らあり

椎のよよとくくも啼か蟬め 朴水

目下下やも流ぬ程は海涼 市隠

文よふらふ

接所東や早苗のしひより涼 半殘

麦乃粒をよみ度す

一袋ふれや鳥羽田のこと 麦 之道

書音

長崎

一箕入るるさくらや嫁のすゝ 曾町

夕さや梅子の奥れ一志きり 及肩

昇猿撫掛

福ひや田と山はくまより 尚白

贈篋

志々あもまゝあゝみのいぬ 北枝

木履ぬく侍ふしより 蓼花 木節

包紙の書

膳所

縁よすり茶袋や秋の露 扇

指のふくれを佛にまき 智月

石ふやちて果下り 輝のぬ 羽紅

桶の輪やまねて鳴をじま 冒房

里はくろりいことさめ 何処

啼やいゝ塩はほろりあゝあゝ越人

越人といひく訪合て

筆のふれ供よ飛入菴のれ 等哉

明年弥生尋旧菴

君のやあしよ果す戸たひつ 嵐蘭

同其

涼しやけ鳥をさへ住けり 曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑誓之首譚也
非比彼山寺偷衣朝市頂冠笑
只任心感物写興而已矣洛下
逸人凡兆去来随翁遊学棋館
竹窓躡等凌節斯有歲屬撰此
集玩弄無已自謂絶超狐腋白
裘者也於是四方嗟友憧々往

來或千里寄書，其中皆有佳句。
日蘊月隆，各程文章，然有昆仲。
騷士不集，錄者索居，竄栖為難。
通信，且有旄倪婦人，不琢磨者。
廉言細語，為喜同志，雖無至其。
域，何棄其人乎哉！果分四序，作
六卷，故不遑廣搜他家文林也。
維暇元祿四稔，卒未仲其，余掛

錫於洛陽，旅亭偶會，兆來吟席。
見需，記此支題，昏尾卒，援毫不
揣拙，庶幾一葦高張，有補于詞。
海澳人云。

夙狂野衲

文州漢書

正竹書之

上京寺田二條上几

井内屋瓦無衛板

